



Title	『扶桑集』の隠逸詩についての考察：「吏隠関係」を中心に
Author(s)	楊, 櫓
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 6, p. 51-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89323
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『扶桑集』の隠逸詩についての考察

―「吏隠関係」を中心に―

日本文学 博士前期課程2年

楊 櫓

はじめに

「隠逸」は漢文学の重要なテーマの一つであり、日本の漢詩文にも詠まれている。古くは『懷風藻』から見られ、勅撰三集の時代に至ると、その詩作数を増す。勅撰三集時代の漢詩に詠まれている「隠逸」については、先行研究でも取り上げられ、「吏隠兼得」すなわち「官吏」でありながら「隠者」でもあるという特徴を論じるのことが多い。しかし、勅撰三集時代以後の漢詩に詠まれている隠逸についてはほとんど言及されておらず、その特徴はまだ明らかにされていない。

『扶桑集』は、勅撰三集時代以後に編纂された漢詩集である。『扶桑集』には「隠逸」という部立が設けられており、その部立に「隠逸」・「樵隠」・「無隠」・「處士」・「山居」という五つの子目が見える。したがって、勅撰三集時代以後に詠まれている隠逸という主題に注目する時、『扶桑集』は重要な位置にあると思われる。本発表では、「吏」と「隠」の関係について、『扶桑集』の隠逸部に所収される詩においてどのように捉えられているかを考察していきたい。

【資料一】大江朝綱「山中自述」(『扶桑集』・卷七・山居)²

山中自述

碧山遁蹟臥松楹
謝遣喧喧世上榮
龍尾舊行應斷夢
鶴頭新召不驚情
商山月落秋髯白
潁水波揚左耳清
唯有池魚呼後至
客隨次第目知名

碧峯に遁迹して松楹に臥し
謝遣す喧々たる世上の榮
龍尾の旧き行には応に夢を断つべく
鶴頭の新たなる召にも情を驚かさず
商山に月落ちて秋の鬚白く
潁水に波揚て左の耳清し
唯だ池魚有りて呼びたる後に至り
客に随へば次第に自らに名を知るなら

○首聯

【語釈】「遁蹟」―逃れ隠れること。³「松楹」―松の柱であり、転じて、山中の家、特に隠者の家进行

¹ 藤原克己「吏隠兼得の思想―勅撰三集と精神の基底―」『菅原道真と平安朝漢文学』(東京大学出版会、二〇〇二年)所収、山本登朗「天皇と隠逸―嵯峨天皇の遊覧詩をめぐって―」『日本古代の「漢」と「和」』(勉誠出版、二〇一五年)所収、宋皓「嵯峨朝詩人の私性と詩壇の関係―隠逸思慕を中心に―」『国語国文』(第八十七巻第八号、二〇一八年八月)所収、田雲明「『懷風藻』山林隠逸詩から『古今集』「山里」歌へ」『言葉と文化』(第十二号、二〇一一年三月)所収、ブライブク・ディーネーケ「『国風』の味わい―嵯峨朝の文学を唐の詩集から照らす」『日本古代の「漢」と「和」』(勉誠出版、二〇一五年)所収
² 本稿に引用する『扶桑集』の本文と訓読は、『扶桑集』全注釈・2・(田坂順子氏、福岡大学総合研究所報120号、p159-172、1990年2月)、を参考にした。
³ 紙幅の制限により、本稿の語釈では、語意のみを示し、出處や用例の掲載は省略する。

う。「謝遣」―謝絶する意。「喧喧」―俗世のやかましいこと。「世上榮」―官吏としてのほまれ。
▶青山に隠遁して山家に身を横たえ、やかましい俗世のことや官吏としての栄利を謝絶することを言う。

○領聯

【語釈】「龍尾」―含元殿前の昇殿の道の意から官吏としての出世の道と言う。「鶴頭」―御上からの招請状。

▶これ迄仕えていた官吏の道などすっぱり夢と思いきり、御上から新たなお召しがかかっても心を動かすこともないことをいう

○頸聯

【語釈】「商山」―四皓の故事。四皓は世をのがれて商山に隠居した四人の隠者である。「潁水」―許由の故事。堯が天下を許由に譲ろうとしたので、許由は潁川に逃れ隠遁したことをいう。

▶有名な隠者である四皓や許由の隠逸生活を描写する。

○尾聯

▶魚に声をかけると名を解するように、列を成して泳いでいることを描写することで、作者は山中生活の楽しみを表現する。

◎以上のように、作者は山林を官場から離れて隠逸の地とする。山林にいる時官吏生活を断念し、朝廷からの招きに対しても動揺しない心境を表す。この作品において、作者は「隠逸」と「官吏生活」を対立的に詠んでいることが分かる。

【資料二】紀長谷雄「山隱無」（『扶桑集』・卷七・無隠）

山無隠

幽人帰徳遂難通	幽人徳に帰せんとして遂に通れ難し
抽却蒿簪別草廬	蒿簪を抽却して草廬に別る
虚澗有声寒溜咽	虚澗声ありて 寒溜咽び
故山無主晚雲孤	故山主無く 晩雲孤なり
青郊不顧煙花富	青郊に煙花の富むを顧みず
絳闕初生羽翼扶	絳闕に初生の羽翼を扶く
巢許若能逢此日	巢許若し能く此日に逢はば
何因終作潁陽夫	何に因りて終に潁陽の夫と作らん

○首聯

【語釈】「幽人」―隠者のこと。「蒿簪」―よもぎの草の簪であり、隠者の簪を言う。「帰徳」―徳義につき従う意で、ここは天子の高德に付き従うこと。

▶隠者は天子の高德に付き従おうとして、世を避け逃れることができなくなり、隠者の証とも言うべきよもぎ草の簪をはずして、隠居の住まいの草廬に別れをつげ、隠逸の状態を脱することをいう。

○領聯

【語釈】「寒溜咽」―流れのたてる音は咽び泣いているようだこと。

▶隠者が山を去り朝廷に戻った後、漠とした寂しい山の様子を描写する。空虚の谷間に冷たいたまり水のたてる音はまるで隠者が山を去ることを悲しんで、咽び泣いているようだ。山は主人をなくして、夕暮れの雲がひとつ、ぽつんと浮かんでいる。

○頸聯

【語釈】「青郊」―春の郊外。「煙花」―かすみと花。「絳闕」―宮闕。「羽翼」―鳥の羽のように左

右から助けることをいい、ここは天子の補佐となる意。

▶隠者は山を離れ、郊外の春景色を目もくれず、朝廷に赴き、天子を補佐することをいう。

○尾聯「巢許」―巢父と許由のことをいい、二人とも堯時代の有名な隠者である。

▶巢父や許由のような隠者はもし今日のような日に逢ったら、どうして潁川の北岸に隠遁する男となつてしまつたりしたろうか。

◎以上の分析を踏まえると、政治が清明であるため、隠士は隠逸生活から脱して朝廷に仕えることになるのはこの詩全体を貫く主題である。

【資料三】都良香「舊隠詠懷敬上所天閣下」(『扶桑集』・卷七・隱逸)

舊隠詠懷敬上所天閣下

不才多愧業猶難	不才 愧じること多く 業猶難し
好是山居一挂冠	好し是れ 山居して一たび冠をかけむ
夜鶴眠驚松月苦	夜の鶴眠り驚きて 松月苦(さや)かなり
曉鴈飛落峽煙寒	曉の鴈飛び落ちて 峽煙寒し
雲埋澗戸幽情積	雲は澗戸を埋め 幽情積もり
水隔寰中野性闌	水は寰中を隔て 野性闌なり
學路蹉跎年暗擲	學路蹉跎として 年暗に擲(なげう)てり
更栽籬竹養漁竿	更に籬に竹を栽えて漁竿を養ふ

○首聯

【語釈】「不才」―才能の乏しいこと。「業」―学業。「挂冠」―官を辞すること。

▶作者は学業の挫折と辞官して山に隠居する志望について述べる。

○領聯

▶山中では、夜眠りについてた鶴が驚いて起きる程、さえわたつた月の光が松の木間から漏れる。夜明けの峡谷に鴈が飛び降り、谷あいには冷たい霧が立ち込めていた。山中に住む生活の様子と山中の景観を詠む。

○頸聯

【語釈】「幽情」―静かな心情、風雅な情懷。「野性」―素朴な自然を愛する心。「寰中」―天子のおさめる所であり、ここでは俗世をいう。

▶雲は谷あいにある家を隠して奥ゆかしい雰囲気醸し出し、めぐつた水は家を俗世から隔て、川の辺りで自然を愛する気持ちが満ちあふれる。頸聯では、作者は山中の自然風景を描写すると同時に、自然を楽しむ気持ちを詠む。

○尾聯

【語釈】「蹉跎」―志を得ない意。「漁竿」―漁夫は脱俗的な隠士像として頻繁に詠まれたため、「漁竿」は隠逸生活を象徴する道具である。

▶末句は「今はもう籬に竹を植え、山中に隠逸する時のために漁竿を育てることとしよう」という意味である。尾聯では、学業の不遇への感嘆して、隠逸への志向を明らかに表している。

◎以上のように、この作品において、作者は「隠逸」を「出世」と対立的に捉え、学業に不遇し、出世の志を得ないため、隠逸生活に入る傾向を表す。

【資料四】菅原道真「題南山亡名處士壁」(『扶桑集』・卷七・處士)

題南山亡名處士壁

秘密郷村與姓名
年顔朽邁意分明
無妻澗戸松偕老
不税山畦黍旅生
泡影身浮修道念
煙嵐耳冷讀經聲
比量心地安閑理
一室應勝我百城

秘密なり 郷村と姓名を
年顔朽邁するども 意 分明なり
妻なく 澗戸の松老いを偕にす
税めずして山の畦に黍旅生す
泡影の身に浮ぶ 修道の念
煙嵐の耳に冷し 讀經の聲
心地安閑の理を比量すれば
一室 我が百城に勝りなむ

○詩題 「處士」―官に仕えることをせず、隠居する人物を言う。

○首聯

►處士本人について描写する。處士は自分の出身の郷村と姓名を秘密にし、年齢相当の顔立ちはすでに衰え老いているが、精神はしつかりとして明瞭である。

○領聯

【語釈】「不税」―税を納めないこと。「旅生」―野生、自生のこと。

►處士が隠居している山の風景をいう。谷あいにあるその家のほとりに松が生えている。妻のない独り身の處士はその松とともに老いることにしている。税を納めもしないで、山の畦に黍は自然に生える。

○頸聯

【語釈】「泡影」―はかないことの喩えとして用いられる。「煙嵐」―嵐がけむつてみえること。

►處士の仏道修行に専念する隠居生活を描写する。泡影のようにはかないその身に浮かんでくるのは、仏道修行の念だけである。山に立ち込めたけぶった嵐気のために、読經の声が耳にすぐく聞こえてくる。

○尾聯

【語釈】「比量」―くらべはかること。「安閑」―心が安らかに落ちついて、ゆつたりとしたこと。

►心地本来安らかに落ち着いて、ゆつたりとしているものという理法とはかりにかけて引き比べてみると、處士の粗末な一つの室の方が、我々が都の立派な宮城を百あわせたよりも勝っていることを感嘆する。

◎作者は處士の隠逸生活を自分の官吏生活と対照的に描いていると言える。

おわりに

本発表では『扶桑集』隠逸部に所収されていた隠逸詩について、作品に用いられている表現や詠法などを分析したうえで、それに詠まれている「隠」と「吏」にはいかなる関係があるのかを分析した。その結果、先行研究に多く言及された勅撰三集時代の隠逸詩に見られる「吏隠兼得」の傾向は見出せないことが分かった。また、【資料一】～【資料四】の作品に詠まれている「吏」と「隠」の関係のまとめは以下の通りである。

- 一・山林を隠逸の地とし、官場から離れる心境は詠出されている。
- 二・政治は清明であるため、隠士は隠逸生活から脱して朝廷に仕えることになる。
- 三・出世の志を得ないため隠逸生活に入ることになる。
- 四・隠者の「隠逸生活」は「官吏生活」と対立的に描写されている。

◎以上の考察により、『扶桑集』に収録されている勅撰三集時代以後の隠逸詩における「吏」と「隠」の関係について、両者は対立的に詠まれていることが窺えると考えられる。